

重い障害があっても笑顔で生活が送れるように

～安心できる生活、安定した生活の土台を整える～

都道府県：埼玉県

会員施設名：大地

発表者氏名：金子知幸

I. 実践の目的・ねらい

Aさん(43歳)は、誤嚥性肺炎を繰り返し10年前に胃瘻造設。てんかん、高血圧症の疾病がある重度重複障害の利用者である。意思疎通は難しいが、楽しいときは笑顔と発声があり、興味のあるものには手が伸びる。他者との関わりが大好きなAさんである。

平成28年5月、夜間に突然の嘔吐、痙攣により緊急搬送され、「脳出血」という診断を受け、生死をさまよう数日間があった。脳出血は完治したものの、その後も高度な医療的ケアが必要となり、そのため入院から3ヶ月後に療養型病院へ転院となった。健康と命は守られるものの、日に日に表情が曇りがちになっていくAさんの姿をみて、大地では、「他の利用者との関わりや安心できる生活環境を通して、また笑顔がみられるように大地で受け入れができる環境を整える」という方針を掲げ取り組みを進めていった。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 受け入れができる環境を整える。

- ①医療面での観察ポイントと対応方法、緊急時マニュアルを作成する。
- ②出来るだけ室温変化のない環境をつくることで身体面での負担を減らす。
- ③介護用ベッドの導入、吸引器、在宅酸素の設置等、居室内における生活環境の整備。
- ④日中、夜間とも様子を観察できる環境づくり。医務室近くへの居室移動。
- ⑤看護師のいない夜間帯においては適切な判断と吸引等適切な処置を職員ができるよう、喀痰吸引等の手技と知識を身につけるための研修への参加。
- ⑥家族への協力を具体的に提示する。

2. 職員へのアンケートを実施し、不安に思っていることを率直に出し合い、解決できる手立てを模索することでお互いの安心へとつなげる。

3. 地域医療との連携を密にする。(定期的なカンファレンスの実施)

III. 実践の結果

脳出血を発症して1年2ヶ月。再び大地での生活がスタートした。

研修への参加や看護師の指導の下、職員は喀痰吸引の手技と知識を身につけ、また医療面での観察ポイントと対応方法が明確になったことで、Aさんへの医療面での支援に職員は自信をもって向き合えるようになった。また、訪問診療や24時間の相談体制、緊急時の常時入院受け入れ等、地域医療との連携を通して、Aさんの健康と命を守る体制作りが整い、Aさんにとっても職員にとっても、何かあった時に適切な対応と処置が受けられる環境であることでの安心感を土台に生活が送れるようになった。Aさんも他の利用者との関わりを通して、笑顔と活気が戻っていく生活が送れるようになってきた。

IV. 分析・考察

健康や命が守られている安心感の上に、生活の充実や豊かさが広がっている。健康や命を守ることを土台として生活を広げ充実させていくこと、障害への理解を深め、障害のある人たちの生活を豊かにしていくことが大切である。

今後、障害の進行により医療的ケアを必要とする仲間が増えていくと予測される中で、利用者同士の関わりある生活を通して笑顔や喜び、発達が十分に保障していけるよう、施設の機能や役割を地域連携を含めて考えていくことが必要である。

※事例等の使用は利用者本人(家族)の承諾を得ています。

失語症への取り組み

～ パソコンで音楽をつくりたい ～

都道府県： 神奈川県 会員施設名： 社会福祉法人同愛会リエゾン笠間
発表者氏名： 今村 憲一

I. 実践の目的・ねらい

平成 17 年に火災により、高次脳機能障害と失語症、右肩麻痺を受傷された 47 歳男性のコミュニケーションの問題を、ご本人が興味を持っているパソコン操作を通して、コミュニケーション手段の獲得とそこから派生した音楽作成へのニーズに対しての取り組みを通して当事者のライフワークを考える。

II. 実践方法・取り組んだこと

H26 年に入所施設からグループホームへ移行しており、通所先の日中活動での週 1 ～2 回パソコンクラブに参加をしてローマ字入力の練習を行なっている。グループホームでは操作に慣れる為、毎日 YouTube などの WEB サイトを閲覧している。音楽作成ソフトを使っての音楽作成にも興味が出て来ており、ソフトを使えるまでのパソコン操作を更に習得中。

III. 実践の結果

文字入力練習をした単語を発声する事で、会話の中で使用できる言葉が増えてきた。言葉に出来る単語が増えた事からコミュニケーションが円滑になり性格も穏やかになってきている。日中活動でのパソコンクラブでは、平成 29 年度内で 38 回にも及ぶパソコン練習により当初、ローマ字入力での 50 音入力がやっとであった所、年度終盤では画像や写真を見てその名前や出来事を文字にて入力し単語を発声出来るようになっている。音楽作成までには至っていないが、YouTube の動画でジャズやロックの洋楽などを盛んに閲覧し音楽への興味や作成への意欲を高めた。ハーモニカの演奏などにもチャレンジしている。

IV. 分析・考察

3 年前にはゲーム機を使用して YouTube を観ているだけであったが、そこからパソコンへの関心が芽生え色々な事に興味が広がり、コミュニケーションの幅が広がった。日中活動での年間 38 回ものパソコン練習を実施したが、各回に行なう課題作成は困難であった。しかし施設とグループホームで本人の興味や関心のある事を日々聞き出し課題作成の原案とした。趣味趣向の部分で興味の幅が大きく広がり、音楽作成への意欲も出て来たが使用するソフトには技術的な習得が必要であり今後の目標となった。音楽への関心や日々の余暇の充実にも繋がり本人にとって生活の質の向上に向けての良い影響が出ている。

今後の目標として音楽作成は勿論の事、文章の作成にも取り組んでいきたい。

ユニットケア再構築に向けての取り組み

～12年目 虹色に輝く生活の実現に向けて～

都道府県：埼玉県

会員施設名：かしの木ケアセンター

発表者氏名：千葉 一馬

I. 研究目的

2007年度より行っている『ユニットケア』は今年で12年目を迎える。2015年度までユニットケアの見直しを繰り返し行ってきたが、利用者の重度化・高齢化等に伴い、これまでの体系のまま支援を充実させるには困難な状況にあると判断した。一方で自立支援を行うにあたってはユニットケアが有効な方法であり、その機能を強化させる必要があった。そこでこれまでの固定観念にとらわれず、自由な発想で利用者のニーズに応えることのできる新しいユニットの形を再構築する取り組みを開始した。

II. 研究方法

2016年4月より『ユニット再構築QCチーム』を立ち上げ、以下の取り組みを行った。

- ① 利用者全員を対象にニーズの再調査を実施、ニーズのカテゴリー分けを行った。
- ② ニーズ調査を基に、これまでのニーズに合わせた6つのユニットから、個別ニーズ特化型のユニット3つと、活動選択型のユニット1つにユニット体系を再構築した。
- ③ ユニットごとに、活動の目的・内容・場所・日課などを検討。所属については利用者のニーズを基に決定した。

III. 研究結果

- ① 個別ニーズ特化型(リハビリ・自立支援・医療的ケア)のユニットについては目的が明確化され、利用者のニーズに沿った活動が提供できるようになった。また、安定した職員配置と活動時間を確保できた。
- ② 活動選択型(日替わりメニューによる余暇活動)のユニットを採用したことで参加への間口が広がり、これまで活動に積極的でなかった利用者や新規利用者が、活動参加に前向きになった。一方で参加利用者や活動メニューに偏りがでてきていること、十分な活動機会の提供ができていないことなど、課題も多く上がっている。

IV. 分析・考察

個別ニーズ特化型の3ユニットについては、アセスメントに沿った活動内容や職員配置と活動時間の確保などから、特色あるサービスが提供できるようになったと言える。もう一つの活動選択型ユニットについては課題が多い。「選択できる」というコンセプトによって新たな参加者を生み出したことは収穫だが、意思表示の難しい利用者のニーズや参加を引き出すまでには至っていない。また日替わりメニューの余暇活動を提供するためには、支援員のレク提供スキルが大きく求められることが実践から分かった。さらには他ユニットと比較すると不安定な職員配置になっていることも、十分な活動機会を提供できていない一因といえる。

活動選択型ユニットに所属する利用者は総数の約半分を占めている。残された宿題に取り組むこと、多くの利用者の期待に応えユニット再構築を完成させることが今後の目標になる。

※ユニットケアとは：日中活動において、利用者ニーズをカテゴリー化し、それぞれ独自の活動目的に沿って支援を行うこと

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

支援施設の感染対策

～標準予防策の重要性の理解から～

都道府県：徳島県 会員施設名：徳島赤十字障がい者支援施設 ひのみね

発表者氏名：藤川 勇実 緒方恵美子

I. 実践の目的・ねらい

平成 28 年度、施設内でインフルエンザが大流行し利用者が体調を崩しただけでなく、集団レクリエーション、外出、面会制限など利用者の生活に大きな悪影響を及ぼした。感染拡大を防ぐために感染症流行時には注意を払って対策を実施したが、個室に限られており、十分な隔離対策が難しいことや、日常生活介助により職員の手を介して感染を伝播させやすいことなど振り返ると様々な問題が浮かび上がり、適切な感染対策の徹底ができなかったという現状だった。そこで、今回、感染対策の基本である平時における標準予防策の重要性の理解からはじめ、日常の感染対策について強化していきたいと考えた。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 感染対策の強化にむけて、現状把握のためにアンケートを実施し、感染対策上の問題点の把握や課題抽出、学習ニーズの把握を行う。
2. アンケートの結果より抽出された課題、問題点に対して改善を図る。
3. 標準予防策・手指衛生の勉強会を実施する。
 - (1) ガウン、手袋、マスクの着脱方法
 - (2) 標準予防策、手洗い方法、WHO 手指衛生 5 つのタイミング
4. 環境や備品管理の改善と標準予防策の勉強会後に再度アンケートを実施し、指導効果の評価と感染対策実施の評価を行う。

III. 実践の結果

1. アンケート結果（取り組み前後の比較）
 - (1) 取り組み前アンケートでは、感染対策上、9 割が問題と感ずることがあると回答。内訳は環境（45%）、手指衛生（23%）、続いて感染症対応（10%）であった。
 - (2) 標準予防策は、説明できると回答したのは 27%から 93%に上昇した。
 - (3) 衛生学的手洗い方法は、説明できると回答したのは 87%から 93%に上昇した。
 - (4) WHO 手指衛生 5 つのタイミングは、説明できると回答したのは 10%から 85%に上昇した。
2. 改善策：便器・尿器の定期消毒や、発熱者の早期ベッド移動の徹底、定期的な換気、物品消毒・環境整備の強化に取り組んだ。
3. 勉強会を実施した結果、各項目で知識の習得につながった。

IV. 分析・考察

職員が感染対策に対しての知識や関心をどの程度持っているか、問題と感ずている部分は何かを振り返ってもらうことで、学習ニーズの把握、課題が明らかになり、感染対策を実施する動機づけにつながったと考える。課題に対して出来るところから職員全体でルールを作り、改善したことで継続した感染対策ができていると考える。勉強会テーマについては「ここだけは習得して」というところを強調し、習得できるまで確実に指導することが重要であり、標準予防策に焦点をしばり繰り返し指導を行ったことで、職員の感染対策の知識の習得につながった。一年間通して感染対策の重要性の啓発を続けることにより、感染対策に対する意識の向上につながったと考える。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

アンケート実施によるサービスの質の向上

～利用者の要望に応じた支援について～

都道府県：香川県

会員施設名：香川県障害者支援施設たまも園

発表者氏名：高木 渉、内海 田美江

I. 実践の目的・ねらい

たまも園では、重度脳性まひの方々を始め、様々な障害を持った方の支援に取り組んでいる。障害支援区分6の方が約8割で、入所者も100名の大規模施設ということもあり、こまかな希望や意向をどう支援に反映していくかが課題となっている。

このため、利用者の意向や希望を確認し、園として取り組む必要のある課題の明確化を目的に、平成25年度と平成29年度に全国身体障害者施設協議会のケアガイドラインを活用した利用者アンケートを行った。

II. 実践方法・取り組んだこと

対象者は、入所者100名中、口頭やジェスチャー等による意思疎通が可能な利用者70名に対して、1対1の面談形式で実施した。アンケートの項目については、平成25年度の項目に、相談支援体制、地域移行等を追加し、食事、排泄等16分野59項目とするとともに、そのうち50項目について満足度を5段階評価でお聞きした。

また、ケアガイドラインの支援の目的、支援の留意点に沿ってサービスが行われているかどうかを面談により確認するとともに、質問事項だけでは、利用者の意向を十分に把握することはできないと考え、各分野に自由欄を設けるとともに、『満足している・いない』に関わらず、その理由もあわせて丁寧にお聞きした。

III. 実践の結果

アンケートを集計すると、満足度を問うた50項目のうち【満足している】【どちらかといえば満足している】との満足度が8割以上の項目が45項目であり、おおむね満足されているという結果だった。平成25年度調査と比較すると、各項目の満足度は上昇しており、園が行ってきた取り組みを利用者が一定の評価をしていることが分かった。一方、「余暇支援の充実」「入浴・排泄時の同性介助」「食事時の雰囲気」等については、満足度が低い状況にあることがわかった。

このため、職員会議等を利用し、職員間で共通認識を図りつつ、職種別及び多職種で検討を行った結果、「きめの細やかな声かけや介護」「外出支援の充実」「個別の要望に対する日中活動への対応」「より同性介護を行いやすい職員配置」等を行うこととした。

IV. 分析・考察

アンケートを実施することで、当施設のサービスの質の現状を確認することができ、また、それぞれの利用者が多様な意見や要望を持っていることに改めて気付くこともできた。一つ一つの要望に真摯に応えていくためには、介護、医務、訓練、調理、事務といった多職種が連携し、園全体で取り組んでいく必要があると考えられる。

また、今回、利用者アンケートの対象としなかった自発的な意思表示が困難な利用者のサービスの質をどう高めていくかも課題となっている。

今後も、当施設の理念でもある「最も援助を必要とする最後の一人の尊重」を実現するために、コミュニケーション支援の充実を図るとともに、利用者のニーズを汲み取りサービスの質の向上に取り組んでいきたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。